JSET NEWS LETTER
Japan Society for Educational Technology
日本教育工学会ニューズレター NO.211
ISSN 1340-9913

INDEX

日本教育工学会第 31 回全国大会の報告 2
シンポジウム 3
International Session 4
トークセッション 4
SIG-01　高等教育・FD 5
SIG-02　教師教育・実践研究 5
SIG-03　教育・学習支援システムの開発・実践 6
SIG-04　教育の情報化 6
SIG-05　ゲーム学習・オープンエデュケーション 7
SIG-06　協調学習・学習科学 7
SIG-07　インストラクショナルデザイン 8
SIG-08　メディア・リテラシー，メディア教育 8
SIG-09　質的研究 9
SIG-10　コンピテンシースタンダードと能力評価手法の開発 9
SIG-11　情報教育 10
ワークショップ 10

2015 年度　日本教育工学会冬の合宿研究会のご案内（第三報） 11
2015 年度　日本教育工学会・産学協同セミナー（第一報） 11
日本教育工学会　特別企画（実践研究活性化）セミナー（第二報） 12
研究会の開催案内「テーマ：学校の教育力向上に資する実践研究／一般」 13
研究会の発表募集「テーマ：ICT を活用した学習支援環境・基盤／一般」 16
今後の研究会のご案内「テーマ：高等教育における教育方法・FD・IR／一般」 16
研究会の開催報告「テーマ：学び方の学習とその支援／一般」 16
日本教育工学会論文誌　特集号　論文募集（最終報） 17
ショートレター増刊号論文募集のお知らせ（第二報） 18
大学教員のためのFD研修会（ワークショップ）のご案内（第二報） 19

事務局●〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル8階
TEL 03-5549-2263
FAX 03-5575-5366
日本教育工学会ホームページ http://www.jset.gr.jp
e-mail:office@jset.gr.jp

日本教育工学会第 31 回全国大会の報告

大会企画委員会委員長 美馬のゆり（公立はこだて未来大学）

日本教育工学会の第 31 回全国大会は，09 月 21 日（月）から 23 日（水）の 3 日間にわたり，電気通信大学を会場に開催されました．結果として 1,129 名という多くの教育工学関係者の参加を賜り，盛会となりましたこと，心より御礼申し上げます．特に昨年から始まった SIG（Special Interest Group）活動に関するプログラムである，トークセッション，SIG セッションともに，多くの方から関心が寄せられました．全体の発表件数は 496 件（シンポジウム 3 件，トークセッション 11 件，SIG セッション 11 件，一般研究（口頭）292 件，一般研究（ポスター）162 件，International Session 11 件），ワークショップ 6 件という，例年どおり大規模な大会となりました．

植野真臣大会実行委員長をはじめとするスタッフの方々には，迅速でにこやかに，そして気配りあふれる対応で参加者を迎えていただき，開催校チームとして大会全般を支えてくださったことに感謝いたします．

今大会の特徴として，次のことが挙げられます．(1) 昨年に引き続き，SIG 活動開始に伴い，SIG セッションを実施しました．(2) 国際連携委員会の企画のもとに，International Session を研究テーマによって 2 つのセッションに分けて実施しました．(3) 国際連携活動の一環として，AECT の Branch 会長を海外からゲストとしてお招きしました．(4) 昨年に引き続き，企業展示に出展いただいた企業のプレゼンテーションの場として，企業ランチセッションを開催しました．(5) 好評により今回も託児室を提供し，より多くの会員が大会に参加しやすくなるよう，費用は全額大会が負担しました．

大会 1 日目は，一般研究発表 1（口頭発表 8 会場）と International Session 1（口頭発表 1 会場）で始まり，一般研究発表 2（ポスター発表），午後には一般研究発表 3（口頭発表 12 会場），引き続き，トークセッション，そしてワークショップを開催しました．各会場とも盛況で，活発な討論が夜 8 時過ぎまで繰り広げられました．初日から 2 日間は，20 社の企業等のご協力により展示会を開催しました．

2 日目には，午前中に一般研究発表 4（口頭発表 12 会場）と International Session 2（口頭発表 1 会場），一般研究発表 5（ポスター発表）を開催しました．午後の全体会では，論文賞と研究奨励賞の表彰と，論文賞受賞の鈴木栄幸氏による講演，その後，シンポジウム，懇親会を実施しました．

3 日目には，一般研究発表 6（口頭発表 12 会場）および一般研究発表 7（ポスター発表），午後には SIG セッション（11 会場）を開催し，大会は終了となりました．

最後に，ご参加いただいた会員の皆様，本大会のプログラム編成を中心とする企画と，シンポジウムや SIG のコーディネータを務めてくださいました大会企画委員および SIG 委員会の皆様，企業展示等のまとめ役にあたられた方々，事前・当日・事後の事務処理を担当してくださいました五反田事務局スタッフの皆様への御礼を申し上げます．

以下に，シンポジウム，トークセッション，SIG セッションの詳細とワークショップについて報告します（登壇者の敬称等は略します）．

シンポジウム

教育工学という学問の特徴は「実践的であること」といえる．しかし，「実践」とは「教育現場での何等かの行為すべて」を意味しているわけではない．本来の「実践的学問」の意味は，教育における学術的な理論を実践的に解釈し，それを教育現場に適用し，理論へフィードバックする，というプロセスを含んでいる．この意味では，教育工学を学んだ専門家は，有用な教育の学術的成果を熟知し，それを解釈して有用な教育実践のデザインを行い，実践を分析して理論へフィードバックできることが必要である．教育工学とは，どの教育理論を学んだかではなく，それぞれの理論と実践を結ぶアプローチそのものだともいえる．このような趣旨でシンポジウム「理論と実践を結ぶアプローチ」が開催された．

最初に，益川弘如氏（静岡大学）は，三宅なほみ先生の思想を紹介しながら，ジグソー学習を紹介した．また，「学び方」の学びを目的とし，21 世紀型スキルとは，従来の教育学が主張してきた発達を促す手法の具現化を目指してきたこと，教材分析，教材作成の重要性，協調的な知識構成の経験による学習の重要性を指摘した．市川伸一氏（東京大学）は，認知心理学の立場から，考えさせる授業の枠組みを提案した．具体的には，両極端の授業方略「教えこみ，つめこみ学習」と「教えずに自分で考えさせる授業」をどちらも「わからない授業」と批判し，2 つの方略のよい部分をバランスよく取り入れる授業方略を提案している．ここでは，教材開発，特に理解深化課題の工夫，教える場面での工夫がなされていることが強調された．佐伯胖氏（田園調布学園大学）は，ショーンの理論，レディの理論を紹介し，独自の解釈と理論を展開した．佐伯氏の主張は，以下のようにまとめられる．1．教室現場の教師は，閉じられた教室の中で，自らの実践に埋め込まれた省察のみにより発達していく存在である．2．教育実践における教師の発達研究は「一人称的探求」そのものである．3．教師と学習者の関係は二人称的でなければならない．4．実践とは，対象に働きかけるのではなく，対象がこちらをどのように見て，どのように「働きかけて」いるかを，「感じ取る（feeling for）」，そして，対象の働きかけ，訴え，願い，ニーズ（求め）に「応じること」である．

植野真臣（電気通信大学）

International Session

本セッションは大会の初日と 2 日目，両日の午前中に行われた．計 11 件の発表があり，うち 7 件が海外出身の教員や留学生によるものであった．

すべての英語発表がこのセッションで行われるため，発表内容は多様なものとなった．医療分野における取り組み，英語学習に関する取り組み，MOOC，フィリピンにおける e ラーニングの動向など，例を挙げてみると多岐に渡ることがお分かりいただけると思う．本セッションには，AECT の Branch 会長も参加され，2 日間に渡りすべての発表を聴講された．特に，ご自身の関心領域であるとして，“Learning Space” をキーワードの 1 つとする発表においては，質疑を通じて踏み込んだ議論を展開されていた．英語で行われる唯一のセッションであることもあってか，発表により人の出入りはあるものの，2 日間通しで参加する方々も見られた．こうした状況下，2 日間の発表・質疑を通じて参加者の相互理解も進み，時間とともに会場の一体感も増していったように思われる．多くの質疑が出されるとともに，休憩時間などにディスカッションを継続している様子が教室内の各所で見られるなど，参加者同士の交流も進んだ充実のセッションであった．

なお, 大会 3 日目の昼の時間には, Branch 会長による“The Effective Use of Technology to Manage the Complexity of Intentional Learning Space” と題したランチョンセミナーが開催された．直前のアナウンスにも関わらず，立ち見が出るほどの参加者となり，こちらも活気溢れるものとなった．Branch 会長の絶妙な進行により，アメリカの大学の雰囲気を感じるようなインタラクティブなセミナーであった．

International Session の様子

Branch 会長による
ランチョンセミナーの様子

佐藤慎一（日本福祉大学）

トークセッション

本大会のトークセッションでは，「JSET Talk 2015 SIG が生み出す新たな研究」というタイトルで，昨年度から始まった SIG（Special Interest Group）についての紹介を行った．まず，SIG 委員長の村上が「SIG 活動のこれまでとこれから」として，Q&A 形式で SIG 活動を説明した．SIG は新しい研究を生み出すためのグループであること，現在 11 のテーマ（SIG）があること，複数の SIG に登録できることを説明し，ぜひ会員の皆様にいろんな SIG に参加していただきたい，ということをお願いした．

次にライトニングトークとして, 昨年度から活動している 6 つの SIG の代表者にこれまでの活動報告とこれからの展望について 5 分で話していただいた．続いて，ロングトークとして，今年度から活動を始めた 5 つの SIG の代表者に，設立の経緯，目的，今後の活動について 12 分で話していただいた．それぞれ個性あふれる，熱い思いにあふれたスピーチで，会場も盛り上がっていたように感じられた．11 の SIG の話を聞いて感じたことは，「教育工学」と言っても本当にさまざまな研究があること，これらがそれぞれ幅と深さをもって協調していけば，ものすごく面白いことができそうだ，というワクワク感であった．

Flexible，Open，Accountable の 3 つのキーワードのもと，今後，SIG 活動がさらに活発になっていくように，SIG 委員長としてできる限りの支援をしていきたい．トークセッションのまとめとして「JSET SIG は競争と共創」という言葉で締めくくったのだが，それぞれの SIG がお互いに切磋琢磨しながら，そして協調しながら，新しい研究を生み出し，教育工学の未来，学会の未来を創っていくことを期待している．そのためには，会員の皆様の積極的な関与が必要であり，ぜひ“当事者意識”を持って，SIG を一緒につくりあげていただきたい，と願っている．

学会の Web サイトでは，「SIG 活動」のページ（https://www.jset.gr.jp/sig/index.html）を設けており，各 SIG の活動成果や研究会・イベントの予定などを掲載している．「会員専用ページ」から，各 SIG に登録することができ，メーリングリストにて情報の共有や議論ができるように整備している．また，新規 SIG の公募も 02 月 15 日を〆切として行う．ぜひ，会員の皆様に SIG 活動を知っていただき，積極的に参加していただくことをお願いしたい．

村上正行（京都外国語大学）

SIG-01　高等教育・FD

コーディネータ：松河秀哉（大阪大学），渡辺雄貴（東京工業大学），根本淳子（愛媛大学），
岩崎千晶（関西大学），村上正行（京都外国語大学）

SIG-01「高等教育・FD」では，理論と実践を踏まえた大学教育・FD に関する研究を発展させることを目的としており，今年度の SIG セッションでは FD の実践者と LA（Learning Analytics）や EDM（Educational Data Mining）の研究者が協力し，教育データ分析の視点から様々な研究の展開可能性を模索した．

大会 3 日目の SIG セッションには，28 名の方が参加してくださった．セッションでは，コーディネータによる趣旨説明の後，FD 実践者の立場からの報告として，大山牧子先生（大阪大学）からご自身が行っている FD 実践の内容や実践との関わり方，実践の研究化を考える場合の課題などについてお話しいただいた．続いて，データ分析者の立場から，山川修先生（福井県立大学）に，IR（Institutional Research）や LA についての解説，IR や LA においてどういったデータをどのように分析することで何が分かるのか，FD にデータ分析を導入することの利点や課題は何か，などについてお話しいただいた．

次に，お二人の話題提供を受け，より理解を深めるため，実践者的な属性を持つ参加者と，分析者的な属性を持つ参加者が両方含まれるように 4 名程度のグループを作り，実践者から分析者，分析者から実践者に互いに質問しあう時間を設けた．違う立場の参加者が疑問をぶつけ合うことで，互いに求めている部分に気づくなど，質疑は大いに盛り上がりを見せていた．各グループには，グループ内で出た質問や回答を，他のグループに向けて発表してもらい共有した．

さらに，次のグループワークとして，質疑を行ったグループのメンバーで，実践者と分析者が協力することで実現できそうな，データ分析に基づいた FD の取り組みを考えてもらった．5 つのグループ内では，白熱した議論が交わされ，提供された話題や，グループ内での質疑を踏まえた，様々な具体的な研究のアイデアが生まれていた．最後に各グループから出たアイデアを全員で共有し，代表から参加していただいた方々への感謝の言葉を持ってセッションを締めくくった．

冒頭にも述べたとおり，本セッションは，理論と実践を踏まえた大学教育・FD に関する研究を発展させることを目的としており，この目的に即した活動を随時提案していく予定である．会員の皆様のご協力とご参加をお願いする次第である．

SIG-02　教師教育・実践研究

コーディネータ：深見俊崇（島根大学），谷塚光典（信州大学）

SIG-02「教師教育・実践研究」では，2015 年 02 月に第 1 回研究会「教師と他の職業人の学習－共通点と違いを考える－」，2015 年 07 月に第 2 回研究会「専門家の学びにおける経験と見え」を開催し，「教師教育・実践研究」に関して日本教育工学会内外の参加者と共に議論できる場を構築してきた．

日本教育工学会第 31 回全国大会における SIG セッションでは，「教師・専門家の学びを支える実践研究」をテーマとして設定し，Lesson Study として世界的に注目を集めるようになってきた「授業研究」に焦点を当てた．授業研究に取り組む学校文化を生み出すためには，何らかの仕掛けが不可欠となることは間違いない．だが，たとえ仕掛けがあったとしても，教師 1 人 1 人が学ぶ意志を持ち，挑戦しようとする心構えがなければ，形式的な授業研究にしかなり得ない．

このような「学びを支える基盤」を議論するために，まず，3 名の登壇者から以下のテーマに関して報告して頂いた．望月紫帆（奈良教育大学）は，「教職経験年数が短い教員同士による協同授業研究型の研修の設計に関する一考察」と題して，教員研修のデザインと研修を通しての若手教師の学びを紹介した．続いて，木原俊行（大阪教育大学）は，「教師の学びに資する校内研修の方法論」と題して，充実した校内研修や授業研究を進めている好事例を取り上げ，その取り組みのポイントを解説した．最後に，三宅貴久子（関西大学初等部）は，「教師の成長と授業研究」と題して，自身のライフストーリーを基に自身の授業を見直すこととなった契機や，研究者・大学院生等様々な人々と関わり合いながら授業づくりを進めていったエピソード等を報告した．

その後，3 名の登壇者を中心としたグループに分かれ，ワークショップを実施した．それぞれのグループの主たるテーマとして，「学びが深まる研修のあり方・手立て」「校内研究を充実させるための手立て」「学び続ける教師になるための出会い・きっかけ，それを超えて何があるか」を掲げ，登壇者と参加者が共に議論を深めていった．それぞれのグループでの充実した議論を踏まえて，今後 SIG-02 で取り組むべき課題などを全体で共有した．

最後に，2016 年 02 月 16 日（火）午後に開催予定の研究会と今後の方向性を確認した．

SIG-03　教育・学習支援システムの開発・実践

コーディネータ：緒方広明（九州大学），森本康彦（東京学芸大学），江木啓訓（神戸大学）

SIG-03「教育・学習支援システムの開発・実践」は，教育・学習活動を支援する情報システムの開発や実践をテーマに掲げている．SIGが活動を開始してから，教育・学習支援システムの開発・実践における問題点の共有や参加者同士の交流を行うことを目的に，合宿形式の研究会を2回開催してきた（ニューズレターNo.210を参照のこと）．本大会におけるSIGセッションは，これまでの2回の研究会の成果と，「ラーニングアナリティクス」に関して，4名と2チーム（計6件）が発表したうえで全体の議論を行った．参加者は延べ58人であった．

まず，山田政寛（九州大学）が，九州大学における教育ビッグデータの取り組みについて報告した．九州大学が組織として学習ログに取り組み，徐々に成果を出し始めていることに強い関心が集まった．続いて，太田剛（放送大学）がLAK2015の報告を行った．LAKは今年で5回目を迎えるラーニングアナリティクスの国際カンファレンスであり，何が注目され，行われているか情報を共有した．次に，飛弾信崇（㈱ベネッセコーポレーション）が，Open指向のdata/platformについて発表を行った．続いて，米川孝宏（HUBネットワークス㈱）が，メッセンジャーアプリInCircleを活用した簡単な学習ログの記録方法について提案を行い，企業との共同研究の一つのモデルを示した．最後に，SIG-03内で実際に共同研究を行っている「集団学習のファシリテーションにおける菓子の効果と分析システム」「外国語学習者個人の状態に合わせたフィードバックに関する研究」の報告があった．本SIGを共同研究の着想と推進の場として，さらに多くの共同研究が生まれ，成果を上げることを期待している．

SIG-04　教育の情報化

コーディネータ：豊田充崇（和歌山大学），藤川大祐（千葉大学），佐藤喜信（内田洋行），
稲垣　忠（東北学院大学），後藤康志（新潟大学），今野貴之（明星大学），
寺嶋浩介（大阪教育大学），森下耕治（光村図書）

SIG-04「教育の情報化」は，主に「教科指導における ICT 活用」及び「情報教育の推進」にかかわる実践的な研究を主軸として，教育現場の先生方や教育委員会さらに企業等とも連携しながら活動を進めていくことを基本としている．Facebook の公開グループ「JSET 教育の情報化 SIG」に 2015 年 11 月現在，当グループには 165 名を超える参加者が登録し，現場に，学校に近い活動の SIG として活動している．SIG が活動開始して以来，JSET 年次大会までに既に 3 回のワークショップ（第 1 回「ひろげる・つなげる・協働する－『教育の情報化』の未来を語る会」（2015 年 03 月・福岡），第 2 回「ICT 環境と子どもたちの学びを考える」（2015 年 07 月・札幌），合同ワークショップ「児童生徒のネット利用に関する教育実践研究のあり方（2015 年 08 月・名古屋）を開催してきた．

JSET 年次大会では，これらを受けて 2 つの柱を立ててワークショップを開催した．1 つ目の柱は「情報活用能力調査の活用」である（コーディネータ・豊田充崇（和歌山大学））．2015 年 03 月に文部科学省より公表された「情報活用能力調査」では，小中学生を対象に CBT 形式によって情報活用能力を測定した結果が報告された．セッションでは公表されている問題について分析し，能力概念やその測定方法について討議した．参加者は実際に調査問題に取り組み，CBT 形式による調査を擬似的に体験したあと，情報活用能力の育成と評価の課題について議論を深めた．

2 つ目の柱は，ICT 研修ファシリテータ養成講座である（コーディネータ・寺嶋浩介（大阪教育大学））．教育の情報化 SIG では，NHK との共同研究により，学校現場や教育センター等で ICT 活用に関する教員研修を担当できる「ICT 研修ファシリテータ」を養成するための講座の開発に取り組んでいる．ICT 研修ファシリテータに求められる目標として，ICT を活用した授業に関する知識，教員研修を企画するスキル，教員研修を運営するスキルを設定しており，その獲得を目指したプロジェクトの概要とこれまでの取り組みを素材として，ICT 活用に関する教員研修の在り方について議論した．

更に第 3 回ワークショップ「タブレット端末が拓く新しい学び」（2015 年 12 月 13 日開催予定・新潟市）について紹介があり，実践的な研究に軸足を置く活動の方向性について確認された．

SIG-05　ゲーム学習・オープンエデュケーション

コーディネータ：藤本　徹（東京大学），重田勝介（北海道大学）

SIG-05「ゲーム学習・オープンエデュケーション」は，ゲーム学習とオープンエデュケーションの国内における研究を活性化し，国際的に評価される優れた研究成果を発信していくことを目的として活動している．両分野の最新動向と研究の可能性を探るため，国内外の先端事例のレビューと調査分析をとりあげた「SIG レポート」を発行し，冊子を全国大会会場で配布するとともに，PDF 版をオンラインで公開した．冊子は用意した 150 部は全数配布完了し，PDF 版は 2015 年 11 月 10 日時点までに 500 部がダウンロードされた．

大会 2 日目の SIG トークセッションでは，本 SIG コーディネータの重田から，本 SIG の設立趣旨と，これまでの活動状況についてプレゼンテーションを行った．3 日目の SIG セッションには 25 名が参加し，活発な議論が行われた．まずコーディネータの藤本と重田より趣旨説明を行い，SIG レポートの執筆者から，担当章の内容について，以下の 5 件の発表があった．(1) ゲーム学習分野の動向（藤本徹（東京大学)），(2) 教科横断型学習・インフォーマル学習（福山佑樹（東京大学)），(3) オープンエデュケーション分野の動向（重田勝介（北海道大学)），(4) MOOC 事業におけるビジネスモデル要素（北村士朗（熊本大学)），(5)「Open」にすることの意味（永嶋知紘（北海道大学)）．セッション後半は，発表内容について寄せられた質問に発表者が答える Q&A セッションを行ったのち，参加者がグループに分かれ，関心のあるテーマやこの分野で研究や実践を進める上での課題やニーズについてディスカッションを行い，参加者全体で今後の研究テーマや SIG の方向性についての議論を行った．現在進展している「Game-based Learning x Open Education」の動向や今後の可能性として，ゲーム学習についての MOOC が開発されて MOOC を軸とした世界規模のオンラインコミュニティ形成が進んでいることや，ゲーム開発者が学習内容について理解を深める手段として MOOC の受講や OER の資料を利用ことが有効であること，学習ゲームをオープンプラットフォーム上で提供することなどの論点が提示された．

本 SIG では引き続き，来年度の SIG レポート発行に向け，SIG 参加者対象の勉強会を年度内に開催し，執筆内容の検討や執筆のための情報共有を行う計画である．

SIG レポート PDF 版ダウンロード URL：https://goo.gl/rB2Daf

SIG-06　協調学習・学習科学

コーディネータ：益川弘如（静岡大学），舟生日出男（創価大学），舘野泰一（立教大学），
鈴木栄幸（茨城大学）

2015 年度の SIG-06「協調学習・学習科学」では，昨年末に出版された The Cambridge Handbook of the Learning Sciences のセカンドエディションを題材に，全員参画型の議論をおこなった．参加者は約 40 名だった．

議論したテーマは「学習科学が目指す教育改革を踏まえて我々研究者としてどう活動すべきか？」である．このテーマについて考えるために，現在書籍の翻訳を行っている 4 名の訳者の方々に話題提供をしていただいた．発表テーマは，「学ぶということ：大島律子（静岡大学)」，「テクノロジを用いるということ：加藤浩（放送大学)」，「研究を進めるということ：大浦弘樹（東京大学)」，「評価するということ：益川弘如（静岡大学)」であった．

本セッションは，知識構成型ジグソー法を活用して議論を行った．参加者は，4 つの発表を全て聞くのではなく，最初に 4 つのうちの 1 つの発表を聞き，同じ発表を聞いた人同士で内容の確認・議論を行った．次に，それぞれの発表を聞いた人たちでグループを組み直し，それぞれの発表内容の共有・テーマについての議論を行った．最後に，フロア全体で質疑応答を行った．

各グループで様々な問いが議論されていたが，4 つの発表に関連した大きな問いとして「よい授業実践をどのように共有していくのか？」，「学びのプロセスをどのように評価するのか？」，「知識をつくることによる学びをどうデザインするか？」，「学びをサポートするテクノロジとしてのロボットの役割とは？」などが議論されていた．これらの問いは，初等・中等・高等に限らず，研究アプローチを考える上でも，新たな教育実践を創り出していく上でも重要な問いである．当日は，これらの問いに対して，率直な議論が交わされていた．

The Cambridge Handbook of the Learning Sciences のセカンドエディションの翻訳版は来年度出版予定である．出版された書籍を題材として，今回のような議論を，より多くの参加者の方々と継続的におこなっていきたいと考えている．

SIG-07　インストラクショナルデザイン

コーディネータ：向後千春（早稲田大学），市川　尚（岩手県立大学），冨永敦子（はこだて未来大学），平岡斉士（熊本大学），高橋暁子（徳島大学）

SIG-07「インストラクショナルデザイン（ID）」は，近年高まりをみせる ID へのニーズを背景に，国内における ID の普及や，研究の活性化を目的として発足した．すでに多くの SIG が存在するなかで，それらに共通する基盤的理論として ID を位置づけている．

SIG セッションでは，学会参加者に ID を広く知ってもらう場とすることを目指し，ID についての話題提供を行いながら，参加者と一緒に考えるワークショップとした．参加者数は 52 名であった．冒頭で設立の趣旨および ID とは何かについて簡単な説明を行った．その後，日本における ID 関連研究の動向として，コーディネータらがまとめた 2005 年以降の「日本教育工学会論文誌」「教育システム情報学会誌」「教育メディア研究」の 3 誌の ID 関連論文（52 本）の傾向を紹介した．そして，52 本の中から 3 本の論文を取り上げ，概要を紹介後，小グループ内で感想や疑問点についてディスカッションをしてもらった．いくつかの質問に関しては全体で共有し，当該論文の共著者または関係者がコメントした．参加者には ID をあまり知らない方も多かったが，素朴なご意見をいただいたことでむしろ議論は盛り上がり，ID に対する興味・関心がより高められたのではないかと感じた．最後に本 SIG に今後期待することについて，コーディネータも加わって小グループで議論をした．初学者のための勉強会・研究会の開催を中心に，多様な要望をいただいた．また，終了後のアンケートでは，ID の代表的な学習意欲に関する理論である ARCS モデルに基づいて，参加者の意欲を 5 件法（5 が高い）で尋ねたところ，「自信」の平均が 3.75（SD=0.72，n=36）と他項目に比べて低かった．このことから，参加者が実践や研究において自信をもって ID を活用できるような支援が，本 SIG に求められていると言えよう．

ワークショップ開催前は 54 名だった登録会員が，終了直後は 61 名，現在（2015 年 10 月 28 日時点）80 名に増えたことから，徐々に学会員の ID に対する認知が高まり，ID 研究に関するコミュニティづくりの第一歩を踏み出せたと感じている．今後は初学者に向けた勉強会の開催などから活動を本格化させ，ID への理解を深める機会や研究者間の交流の場を提供していく予定である．そして，ID を探求する人々のコミュニティを拡大しながら，参加者とともに新しい研究成果を創出していきたいと考えている．

SIG-08　メディア・リテラシー，メディア教育

コーディネータ：中橋雄（武蔵大学），宇治橋祐之（NHK 放送文化研究所），浅井和行（京都教育大学）

現代社会におけるメディア環境は複雑化しており，「メディア・リテラシー」とその育成を目的とする「メディア教育」に関する研究は，これまで以上に重要性を増している．当該研究分野に関する個々の研究発表は数多く行われ蓄積されてきたが，それらの研究成果を有機的に結びつける機会は限られていた．そこで，これまでの知見を体系的に整理し，個々の研究を加速させるとともに，現代的な課題に対応しうる新しい成果を発信するために本 SIG を設立した．

SIG が設置されてはじめての全国大会であったが，SIG セッションには 39 名の参加者があり，充実した議論が行うことができた．特に研究者，大学院生，学校現場，メディアの制作者など，多様な立場の方々がバランスよく集まって議論できたことは有意義であった．

まず，SIG 代表の中橋雄（武蔵大学）から SIG の設置趣旨および活動内容について説明がなされた．全国大会の SIG セッション以外に年 3 回程度研究会を開催し，「ゲスト講師の講演から学ぶ」，「これまでに積み重ねてきた研究報告・意見交流」，「現在進めている研究の経過報告・意見交流」，「査読論文・科学研究費申請書のピアレビュー」，「共著本の出版計画」などについて取り組むことが確認された．

次に 3 名の研究者からこれまで取り組んできた研究内容と今後の方向性について報告があった．森本洋介（弘前大学）は，「諸外国におけるメディア・リテラシー教育」についての研究動向を報告した．佐藤和紀（東京都北区立豊川小学校／東北大学大学院）は，「メディア・リテラシー実践の開発と学習効果測定」についてこれまでの研究成果を説明した．中村純子（東京学芸大学）は，「国語科教育におけるメディア・リテラシー実践研究の成果と今後への課題」について報告した．その後，参加者は，3 つのグループに分かれ関心を持っている研究テーマについて交流するとともに，今後取り組む意義のある研究内容についてワークショップ形式でアイデアを出しあった．

最後に宇治橋祐之（NHK 放送文化研究所）から，まとめと今年度の SIG 研究会について説明がなされた．東京で 2015 年 12 月 19 日に，熊本で 2016 年 02 月 27 日に研究会を行う予定である．今後も参加者のネットワークを広げ，知と知をつなぎあわせて，あたらしい知を創造する営みを継続的に行う．

SIG-09　質的研究

コーディネータ：岸磨貴子（明治大学），杉原真晃（聖心女子大学），久保田賢一（関西大学），
大谷　尚（名古屋大学），尾澤重知（早稲田大学），金子大輔（北星学園大学），
山本良太（東京大学），時任隼平（関西学院大学）

SIG-09「質的研究」では，教授・学習を含む多様な場面におけるプロセスや相互作用に関心を持ち，質的なデータを採取し分析することによりこれらを探求します．

第 31 回全国大会 3 日目の SIG セッションでは，「教育工学研究における質的研究手法」というタイトルでワークショップを実施し，81 名の方々に参加していただきました．今回のワークショップでは，今年度より新しく発足された本 SIG の趣旨説明に加え，(1)「教育工学研究における質的研究論文に関するレビュー結果の共有」(2)「質的研究に係る疑問」をテーマにディスカッションを行いました．

（1）ではコーディネータ陣が分析した「日本教育工学会論文誌（SUPPL 含む）の投稿論文における質的研究手法の採用（2006 年度～2014 年度）」に関する結果を共有し，質的研究手法を採用した論文は 15%～21%程度であり，ここ 10 年で特に採用数が増加している訳ではない事などを確認しました．また 1995 年以降に掲載された質的研究手法そのものに関する論文を 3 本取り上げ，中身を確認しました．

（2）では，参加者の方々が付箋紙に書いた「質的研究に関する疑問」を分類し，模造紙上で整理したものを用いてディスカッションを行いました．この際，コーディネータである大谷尚会員，久保田賢一会員に加え，質的研究手法に関する高次な知見や研究業績を持つ箕浦康子（お茶の水女子大学・名誉教授）に参加していただきました．ディスカッション時の話題は，フィールドでのデータ収集の仕方や分析時に用いるソフトウェアなど，具体的な研究方法に関する事に加え，そもそも質的研究は量的研究に比べどのような点で異なるのかといった研究のあり方の違いに関するものなど，多岐にわたりました．

今後は，質的研究に関する基本的な理解を促すワークショップ等に取り掛かる予定です．また，過去の質的研究手法を採用した論文の分析結果や最新の研究手法に関する知見等を web で共有し，学会員が各々の研究テーマをより深く追及するための学びの場となれるよう，活動に取り組んでいきます．会員の皆様のご協力とご参加をお待ちしております．

SIG-10　コンピテンシースタンダードと能力評価手法の開発

コーディネータ：玉田和恵（江戸川大学），萩生田伸子（埼玉大学），松田稔樹（東京工業大学）

近年，多くの国で，育成すべき資質・能力をコンピテンシー規準として明確化し，教育課程編成や教育方法の変革，評価などに反映させて，教育の質保証を図る動きが見られる．また，この施策を支援する一つの方法論として，知識を問うテストから，パフォーマンス評価重視に移行すべきとの指摘もある．昨年末から始まった中教審の学習指導要領改訂に関する議論も，この方向性に即しており，高大接続のあり方，特に大学入学者選抜の改革と一体的に議論が進んでいる．大会直前には，中教審教育課程企画特別部会の論点整理や高大接続システム改革会議の中間まとめも公表された．

課題研究を衣替えした従来の SIG と異なり，本 SIG は，この学会内で現在あまり行われていないが，今後の教育工学の発展に重要なテーマとして，上記の状況に対応する研究や実践を促進することを目的に申請し，設置が認められた．そこで，セッションは，発起人グループの取り組みを紹介しながら，趣旨説明を行うところから始まった．特に，上述の論点整理が，育成すべき資質・能力を列挙するにとどまり，明確化も構造化も不十分なことなどを指摘しつつ，当面は，教科横断的な能力や教科の本質（見方・考え方など）の「インフォームドな指導」を考慮したカリキュラム編成や授業改革を各学校レベルで促進するための支援方法を考える必要があることを述べた．

その後，SIG 代表である玉田和恵（江戸川大学）の司会で，趣旨説明者の松田稔樹（東京工業大学）と，招待講演者である坂元章（お茶の水女子大学），大久保智哉（大学入試センター）が発表を行った．今回の 3 人に共通するキーワードは，CBT（コンピュータを用いた評価）である．松田は，教科横断的・汎用的スキル，見方・考え方，領域固有知識の関係を明示的にモデル化し，ICT を用いたゲーミング教材で指導・評価するという方法論を提案した．坂元は，文科省の情報活用能力調査の枠組みと結果を示しつつ，評価方法としての課題を指摘した．大久保は，現状の大学入試センター試験の回答分析から，受験者層が大きく 2 つに分かれ，選抜試験としての弁別度に課題が見られることを指摘し，「大学入学希望者学力評価テスト（仮称）」に向けた CBT の導入などの可能性と課題を示した．その後，SIG 副代表の萩生田が指定討論者として加わり，質疑が行われた．

今後，他学会とも連携しながら，研究方法論等の勉強会を中心に活動を進めることが提案され，学会の SIG 用 ML と東京工業大学松田研究室 Web（www.et.hum.titech.ac.jp/SIG-10/）などで広報する方針を説明した．

SIG-11　情報教育

コーディネータ：加納寛子（山形大学），藤川大祐（千葉大学），布施　泉（北海道大学），
野崎浩成（愛知教育大学），梅田恭子（愛知教育大学），江島徹郎（愛知教育大学）

ヒューマノイドロボットの普及により，販売員や受付係，案内係，運転手や通訳などの大半の仕事をロボットが担うようになり，会計士や医師や弁護士の仕事の一部すらロボットにおきかわる時代が到来する．技術革新が先行し教育が後追い状態になると，産業革命の頃に起きたラッダイト運動，つまり機械に仕事を奪われた人たちが，機械の存在を憎み，脱穀機や機織り機の打ち壊しを行ったように，ヒューマノイドロボットに仕事を奪われた人々が，ヒューマノイドロボットの打ち壊しを行うような事件が起きるかも知れない．既に知識の蓄積と検索能力は，人よりもコンピュータの方が勝っている．人間には容易に記憶できない膨大な知識をコンピュータは保有し，瞬時に検索することができる．人間では膨大な時間がかかる計算もコンピュータは瞬時に計算することができる．しかしながら，コンピュータにプログラムされていない突発的な状況に合わせて情報を分析し判断し咀嚼する力においては，AI 時代になってもコンピュータは人を越えることは難しい．このような AI に置き換わることのない資質・能力を育成するためのカリキュラムを議論した．

前半では，参加者は「問題解決」「情報システム」「情報通信技術」「情報モラル」「情報の歴史」「情報機器の操作」「情報分析」に分かれ，小学校 1 年生から高校 3 年生まで，学ぶ必要がある内容を表「情報教育カリキュラム案」に書き出した．後半では，完成した「情報教育カリキュラム案」を見ながら，AI 時代に育てたい児童像･生徒像について参加者一人一人に語っていただき，ディスカッションをした．

今回は，国際会議でよく行われているワークショップ＋ナラティブ型を組み合わせた SIG セッションを参考に，参加者の方々が主役，主催者は脇役として進行する方針をとった．しかしながら，自分の語りの順番が回ってくる頃に帰られてしまった方もおり，後から，登壇者を立てる日本型の進行方式を期待していたようだと聞いたため，来年度以降は日本型と国際型合わせて検討する予定である．

ワークショップ

ワークショップは，主催者が設定した教育工学に関連するテーマについて，口頭・ポスター発表とは違った形でインフォーマルに語りあう場であり，実践は進んでいるものの研究として認識されていない問題や，新しい情報技術の教育利用などの萌芽的な研究について議論を行っている．

今年度の全国大会においては，大会 1 日目の 09 月 21 日（月）18:00～20:00 の時間帯が割り当てられた．今回はワークショップの募集に対して 6 件の応募があり，大会企画委員会での審査を経て，以下の 6 件のワークショップが実施された．

（1）情報教育（SIG）
（2）教育工学のサステナビリティを考える
（3）地域・学習者に応じた ICT 利用の防災学習を考える
（4）「映像の世紀」から「魔法の世紀」へ～授業づくりはどう変わるのか？
（5）いじめ予防を志向する授業づくりについて考える
（6）「キャリア教育」の今を知る！ある日突然「キャリア教育」を担当することになった教員のためのワークショップ

1 ワークショップあたり 8 名から 30 名以上の参加があり，全体では 120 名以上が参加した．参加人数の多寡にかかわらず，どのワークショップも主催者の創意工夫に富んだ企画により，参加者からは大変な熱気が感じられた．なお，ワークショップは大会参加者以外にも無償での参加を認めることで，会員の交流の幅を広げる場としても機能しており，今後の継続的な発展が期待される．

2015 年度　日本教育工学会冬の合宿研究会のご案内（第三報）

テーマ　「実践研究のデザイン　ー実践を研究に，研究を実践に活かすー」

■ 趣旨

実践現場と連携した実践研究は教育工学において重要な研究領域です．現在，さまざまな研究者が実践現場と連携した研究を行っています．

しかし，研究のデザインは個々の教育現場の状況や研究者との関係によって変化します．

そこで冬の合宿研究会では，「実践研究のデザイン」をテーマにした研究会を開催します．実践現場の課題をどのように捉え，どのように関わり，研究としてまとめていくのか，それによって得られた研究内容をどのように現場で活用するのかについて，実践者，研究者とのディスカッションの中から整理していきます．また，後半では現場の課題をもとに具体的な研究デザインを考えるワークショップを企画しています．

■ 日　程　2016 年 02 月 20 日（土），21 日（日）（予定）
■ 定　員　40 名程度
■ 講　師　村川雅弘（鳴門教育大学）
■ 対象者　学校教育に関わる実践者，研究者，若手研究者や大学院生，その他
■ 会　場　鳴門教育大学
■ 参加費および宿泊費　16,000 円（宿泊代，食事代，情報交換会代込み）（予定）

申し込み，および詳細なプログラムは教育工学会の HP 上に 12 月に開設する Web ページからお願いいたします．

2015 年度　日本教育工学会・産学協同セミナー（第一報）

テーマ：
デジタル教材・学習記録の規格標準化の動向と今後教育工学の立場から学習記録データの活用を考える

■ 趣旨

我が国としても教育改革が進み，2020 年を目標に 21 世紀型の学びへと大きく変わろうとしています．

今後は学習者中心の主体的，協働的な学びと変化していく中で ICT を活用した学習活動が増え，そこで蓄積された学習記録データを分析することで，学びの質や方法の改善，評価につながることが期待されています．特に学習記録データを分析・解析・活用していくための「学習ビッグデータ分析（LA：Learning Analytics）」が注目され，デジタル教材や学習履歴に関する国際標準化は急速に進んでおり，標準化団体でのワーキング・グループや研究学会の新規設立などの動きが活発となっております．日本国内でも近年これらの標準化に向けて産・官・学での動きが盛んになり検討が進んでいます．

今回の産学協同セミナーでは，デジタル教材や学習記録データの国際標準化，学習記録データによる学習解析，研究学会の状況，学習理論からみた活用の意義について情報共有をするとともに，今後アクティブ・ラーニングなどの「学習者が主体的に取り組む学習者中心の学び」の中での学習記録データの必要性について考えるとともに，現時点での課題を明確にし，デジタル教材や学習記録データの標準化の在り方や，集め方，解析の方法等，蓄積されたビッグデータの活用方法について，産・学それぞれの立場から幅広く議論を展開したいと考えます．

こうしたテーマに関心を抱く，多くの方のご参加をお待ちしていますので，まずは日程のご案内をさせていただきます．

■ 日　程　2016 年 03 月 19 日（土）13:30～17:00　（受付開始 13:00）
■ 会　場　株式会社内田洋行　新川オフィス（ユビキタス協創広場 CANVAS）
　　東京都中央区新川 2-4-7
■ 参加費　無料
■ 定　員　100 名 ※先着順で締め切らせていただきます．
■ 主　催　日本教育工学会 企画委員会
■ 登壇者（予定）

上智大学　理工学部情報理工学科　教授　　田村　恭久氏
日本電子図書出版協会副会長　イースト株式会社社長　下川　和男氏
東京学芸大学　情報処理センター　准教授　　森本　康彦 氏

日本教育工学会　特別企画（実践研究活性化）セミナー（第二報）

日本教育工学会特別企画（実践研究活性化）委員会
委員長　村川雅弘（鳴門教育大学）

教育工学の知見を学校現場に還元していくと共に，教育実践に基づく研究及びその成果の発信に関してのセミナーを平成 26 年度より開催しています．昨年度は約 30 名の現場教師，大学院生，指導主事，大学教員が集い，学校や教育センター等の研究・研修計画を持ち寄り，教育工学的な視点からの助言・協議を行いました．昨年度のセミナーによる改善プランを今年度に実施したという報告も受けています．

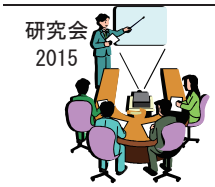
今回は第 2 回目です．大学院や教職大学院等で教育現場をフィールドとして実践的な研究を計画・実施されている方あるいは指導されている方，学校現場において研究主任等として中心的に取り組まれている方，あるいは学校現場を対象として研究的な立場でかかわっておられる方，教育センター等で研修を企画・運営されている方等々のご参加をお待ちしています．

日時：2016 年 03 月 13 日（日）10:00～16:00
会場：岐阜大学サテライトキャンパス「多目的講義室」
（JR 岐阜駅前・岐阜スカイウイング 37　東棟 4 階　http://www1.gifu-u.ac.jp/~gifu_sc/src/）
定員：40 名
申込：今野貴之（明星大学）takayuki.konno@meisei-u.ac.jp 宛てにメールで，①氏名，②所属，③メールアドレス，④ワークショップでの実践研究計画の簡単な紹介，を 03 月 06 日（日）までにお知らせください．ワークショップでの資料は 03 月 09 日（水）までにメールでお送りください．④については，A4 版 1～2 枚とします．また，④の書式は研究会の原稿見本（https://www.jset.gr.jp/study-group/files/jset-study-group-format140301.pdf）を参考に作成した PDF 原稿としてください．ただし，英文でのタイトル・氏名・所属は不要です．
昼食：JR 岐阜駅ビル内 ASTY 岐阜・ACTIVE-G の飲食店をご利用いただけます．
ASTY 岐阜：http://www.nsk-eki.com/asty/gi1f.html
ACTIVE-G：http://active-g.co.jp/rest-cafe/
日程：（予定）

1. 10:00～10:10　**開会・挨拶**
2. 10:10～11:10
   パネルディスカッション：「教育工学の知見を学校現場にどう還元しているか」（仮題）
   村川雅弘（鳴門教育大学）・三橋功一（北海道教育大学）
   小柳和喜雄（奈良教育大学）・寺嶋浩介（大阪教育大学）
   大学院や教職大学院，学校現場，教育センター等で長年研究指導を行ってきた本学会の研究者が，教育工学のどのような知見をどう還元しているのかを熱く語り合います．
3. 11:20～12:00　**参加者全員による自己紹介を兼ねた研究・研修計画の紹介**
   研究・研修計画の紹介内容を受けて，午後のチーム編成を行います．
4. 13:00～15:00
   ワークショップ：「教育実践研究構想の練り上げワークショップ」
   大学院生や教職大学院生または研究主任，指導主事等に，平成 28 年度に実施する予定の実践研究計画や研修計画を可能な範囲で持参していただきます．チーム内（6 名程度，研究者が必ず 1 名入る）において紹介し，計画の立て方やデータの集め方・分析の仕方等について意見や助言を出し合ってまとめます．
   計画紹介と練り上げワークショップ（チーム内の各事例紹介及び協議・助言 20 分×5 件程度）
5. 15:10～15:40　**全体発表**（5 分×6＝30 分：各チームから代表 1 事例の成果）
6. 15:40～16:00　**総括・閉会**

日本教育工学会研究会　　http://www.jset.gr.jp/study-group/

研究会の開催



テーマ　学校の教育力向上に資する実践研究／一般

●日　　時：2015 年 12 月 12 日（土）

●会　　場：新潟大学五十嵐キャンパス

（〒950-2181 新潟県新潟市西区五十嵐 2 の町 8050 番地）

●担　　当：澤邉潤（sawabe@ge.niigata-u.ac.jp）

プログラム　　発表時間：発表 1 件につき 24 分（発表 19 分，質疑 5 分）

A 会場（農学部 C 棟 203 教室），B 会場（農学部 C 棟 303 教室），C 会場（農学部 C 棟 202 教室）

09:55-10:00　**諸連絡**

10:00-12:05　**午前の部**

A1）児童生徒の実態イメージカードを用いた模擬授業デザインの有効性の検討
佐久間大（東京工業大学大学院），長谷川勝久（東洋大学），
室田真男（東京工業大学大学院），中川正宣（東京工業大学大学院）

A2）児童生徒の実態イメージカードを用いた授業省察時における評価観点の抽出とカテゴリの検討
今井智貴（東洋大学），佐久間大（東京工業大学大学院），
長谷川勝久，高石哲巳，畠野真理子（東洋大学）

A3）循環型教育システムを有する学校と育成される能力
守一介（早稲田大学大学院），野嶋栄一郎（早稲田大学）

A4）形成的評価とフィードバックのリアルタイム化を指向したキットビルド概念マップの教師用アナライザの設計・開発
山中彰，前田啓輔，林雄介，平嶋宗（広島大学大学院）

A5）全国学力・学習状況調査結果を活用した学校関係者向け分析ワークショップの開発
平野智紀（内田洋行教育総合研究所），奥山賢一（甲斐市立竜王小学校），
八代一浩（山梨県立大学）

B1）ICT 研修ファシリテーター養成講座の開発
脇本健弘（横浜国立大学），稲垣忠（東北学院大学），寺嶋浩介（大阪教育大学），
中橋雄（武蔵大学），島田希（高知大学），堀田龍也（東北大学），坂口真（日本放送協会）

B2）講義コンテンツを用いた学習における視聴履歴取得機能および学習分析機能の提案
高田良介（香川大学大学院），
後藤田中，藤本憲市，村井礼，林敏浩，八重樫理人（香川大学）

B3）ノート活用を組み込んだ講義設計　－学習履歴の可視化と学習サイクルの構築－
皆川雅章（札幌学院大学）

B4）ビジュアルプログラミングツールを用いた小学生向け制御プログラミング教育の検討
矢野口聡（松本大学松商短期大学部）

B5）模擬授業における児童生徒役の反応可視化手法の検討
畠野真理子（東洋大学），佐久間大（東京工業大学大学院），
長谷川勝久，高石哲巳，今井智貴（東洋大学）

C1）MBA コースにおける口頭発表指導　－失敗から学ぶ－
西谷まり（一橋大学）

C2）入門語学クラスで教師は何に注意を向けているのか？
足立祐子（新潟大学），松岡洋子（岩手大学）

C3）中学生のキャリア意識の検討　－自律的な学習動機づけとの関連に注目して－
伊藤大輔（金沢工業大学），磯部征尊（愛知教育大学）

C4）異なる ICT 環境の教室で学ぶ児童の発表意欲の違いに関する検討
相沢優，堀田龍也（東北大学大学院）

C5）ストーリー中心型カリキュラム（SCC）における文脈活用の実態
竹岡篤永（高知大学／熊本大学大学院），根本淳子（愛媛大学／熊本大学大学院），
高橋暁子（徳島大学／熊本大学大学院），鈴木克明（熊本大学大学院）

13:05-13:10　委員会挨拶・諸連絡
13:10-15:15　午後の部①

A6）大学講義における紙ベースでのキットビルド概念マップの実践活用
山元翔（近畿大学），平嶋宗（広島大学大学院），荻原昭夫（近畿大学）
A7）高専の地域貢献活動とサービス・ラーニングの原則との比較及び担当教員の意識に関する一考察
石田百合子（明石工業高等専門学校／熊本大学大学院），平石年弘（明石工業高等専門学校），
松葉龍一（熊本大学大学院），根本淳子（愛媛大学／熊本大学大学院），
鈴木克明（熊本大学大学院）
A8）高等学校における反転授業とゲーミフィケーションを取り入れたヘルスリテラシー教育の意識面に対する効果
江藤真美子（九州大学大学院），井上功一（福岡県立糸島高等学校），
山田政寛（九州大学大学院／九州大学基幹教育院）
A9）横浜国立大学教員養成スタンダードを用いた教師の資質・能力に関する学生の自己評価の分析
野中陽一，脇本健弘，泉真由子，白井達夫，高木まさき，米澤利明，大島聡（横浜国立大学），
石塚等（国立教育政策研究所），北村公一（神奈川県立総合教育センター），
名執宗彦（神奈川県立平塚盲学校），小野寺泰子（横浜国立大学）
A10）地域と創る，３つの教員養成・育成スタンダード －学部生・教職大学院生・現職教員をつなぐスタンダード作成の試み－
白井達夫，高木まさき，米澤利明，大島聡，脇本健弘，泉真由子，野中陽一（横浜国立大学），
石塚等（国立教育政策研究所），北村公一（神奈川県立総合教育センター），
名執宗彦（神奈川県立平塚盲学校），小野寺泰子（横浜国立大学）

B6）インターネット依存の改善とインターネット環境への適応を促す単元開発の試み
鶴田利郎，野嶋栄一郎（早稲田大学学術院）
B7）メディア・リテラシーに関する実践研究の傾向分析
後藤心平，相沢優（東北大学大学院），
佐藤和紀（東京都北区立豊川小学校／東北大学大学院），堀田龍也（東北大学大学院）
B8）“優秀学生”向けの養成プログラムの調査とその特徴付け －愛媛大、金沢工業大、九州大、創価大、筑波大、新潟大－
北垣郁雄
B9）メディア・リテラシーの涵養を図る授業の開発と評価 －高等学校と短期大学における比較調査を基に－
峰本義明（新潟青陵大学短期大学部），田中一裕（新潟県立新潟江南高等学校）
B10）教材設計支援のためのジョブエイドの動向調
根本淳子（愛媛大学），市川尚（岩手県立大学），竹岡篤永（高知大学），
高橋暁子（徳島大学），鈴木克明（熊本大学）

15:30-17:10　午後の部②

A11）メディア・リテラシー教育における初心者教師の授業設計に関する行動分析(2)：－教師歴 20 年以上のベテラン教師への分析を通して－
佐藤和紀（東京都北区立豊川小学校／東北大学大学院），堀田龍也（東北大学大学院）
A12）初任者教師の授業力向上を目指した教員研修システムに関する事例研究
丸山裕輔，鈴木真史，内田祐介（五泉市立五泉小学校）
A13）学び続ける教員を支援する対面・遠隔型の教員研修システムの開発
後藤康志，松井賢二（新潟大学）
A14）家政科教育における能動的学習のための情報共有システム活用の取り組み
西村悟史，福田賢一郎，西村拓一（産業技術総合研究所），
土肥麻佐子（大妻女子大学短期大学）

B11）『教育工学的な視点に基づく教師教育ハンドブック』の形成的評価
木原俊行（大阪教育大学），中山実（東京工業大学），吉崎静夫（日本女子大学），
堀田龍也（東北大学），野中陽一（横浜国立大学）

B12）理科教育法用模擬授業ゲーム開発のための科学的な方法と見方・考え方および領域固有知識の習得モデル
松田稔樹（東京工業大学大学院），小佐野隆治，砂岡康宏（東京工業大学附属科学技術高等学校）

B13）児童生徒の主体的な学びのための構成的アプローチに基づく算数・数学学習の動画教材作成
丸山浩平，森本康彦，宮寺庸造（東京学芸大学）

B14）総合型地域スポーツクラブにおける異学年集団構造の検討
矢野大地（早稲田大学大学院），野嶋栄一郎（早稲田大学学術院）

C6）H22 及び H26 年度版算数教科書における統計的リテラシーに関する記述の比較分析
槇誠司（山形県立庄内総合高等学校），堀田龍也（東北大学大学院）

C7）メタ認知による文章題解決についての研究 －大学生を対象としたメタ認知能力と文章題の関係性－
守谷真一，清水優菜，山本光（横浜国立大学大学院）

C8）FPI 理論に基づく日本アニメを活用したスキット活動と実践
郝皓（三重大学大学院），須曽野仁志，下村勉（三重大学）

C9）教学データと SDLRS を用いた科目選択支援システムの開発
松田岳士（首都大学東京），渡辺雄貴（東京工業大学），重田勝介（北海道大学），
加藤浩（放送大学）

● 発表時間：当研究会は会員・非会員による討論の場を作ることを目的として開催してきました．討論時間を確保するために，持ち時間 24 分において質疑応答の時間を 5 分以上は確保していただいております．よろしくご理解願います．

● 参加費用：参加費は無料です．研究会報告集の年間予約購読代金（3,500 円）を支払済みの本学会会員以外の方は，報告集代として 1,000 円を当日受付にてお支払いください（**ただし，本研究会受付時に年間予約購読代金の支払済みが確認できない場合には，当日受付にて年間予約購読分の報告集をお渡しすることができませんのでご了承ください**）．また，当日受付にて年間予約購読の申込みも可能です．なお，年会費には研究会報告集の年間購読代金は含まれておりません．

● 交通案内：JR 新潟駅から JR 越後線「新潟大学前」まで電車で 20 分，「新潟大学前」から大学まで徒歩 15 分です．JR 新潟駅から大学までのバス（45～50 分程度）もございます．詳しくは，新潟大学ホームページの「交通アクセス」（http://www.niigata-u.ac.jp/top/access_ikarashi.html）をご参照ください．

● 昼食案内：昼食時間帯のみ学内の食堂（11:30～14:00）が営業されます．また，学内にコンビニ，大学周辺には飲食店がありますが，予めご用意いただけますと幸いです．

● 情報交換会のご案内：研究会終了後，JR 新潟駅付近にて情報交換会を開催する予定です．情報交換会については研究会当日にご案内いたします．

研究会の発表募集　　テーマ：ICT を活用した学習支援環境・基盤／一般

●日　　時：2016 年 03 月 05 日（土）　　●会　　場：香川大学幸町キャンパス（担当：八重樫）
●申込締切：2016 年 01 月 04 日（月）17:00　●原稿提出：2016 年 01 月 25 日（月）17:00

●募集内容：
平成 25 年 06 月に閣議決定された日本再興戦略において，「1 人 1 台の情報端末による教育の本格展開に向けた方策の整理」や，「デジタル教材の開発や教員の指導力の向上に関する取り組みを進め，双方向型の教育やグローバルな遠隔教育など，新しい学びへの授業革新の推進」といった ICT の教育への活用が，日本再興のための戦略の一つに掲げられています．このような背景を踏まえ，教育機関においては様々な ICT を活用した学習支援環境や基盤が構築されていますが，その運用負荷やコストの増大は教育機関の負担となっています．

そこで本研究会では，ICT を活用した学習支援環境や基盤に関する実践研究をテーマに発表を募集します．たとえば，教育機関で導入した ICT を活用した学習支援環境や基盤の効果的な構築や運用方法に関する研究，構築した学習支援環境や基盤の評価に関する研究が想定されますが，従来通り，上記テーマにこだわらず教育工学一般の発表も募集します．

●申込方法：研究会 Web ページよりお申し込みください．なお，本年度から**締切日時が“平日 17:00”までに変更となりましたのでご注意ください．**

●原稿執筆：締切後 1 週間以内に，申込時に登録されたメールアドレス宛てに発表の採択結果と執筆要項をお送り致します．

●原稿提出：原稿の提出は PDF 形式で，研究会 Web ページの「発表申込フォーム」より，発表申込時に発行された「受付キー」を使用してご登録ください．なお，期限までにご提出いただけない場合は，自動的に発表取消となりますのでご注意ください．

今後の研究会のご案内

月日	テーマ	会場	申込締切※	原稿提出締切※
2016 年 05 月 21 日（土）	高等教育における教育方法・FD・IR ／一般	大阪大	03 月 22 日（火）	04 月 11 日（月）

※ **締切日時が平日 17:00 に変更**：
2015 年 07 月研究会（JSET15-3）から発表申込および原稿提出締切日時は“**平日 17:00**”に変更となりましたのでご注意ください．

年間予約購読のお勧め

●年間購読：研究会報告集の年間予約購読価格は郵送料込みで 3,500 円です（当日売りは 1 冊 1,000 円と割高になります）．研究会の受付でも年間講読を受け付けております．

研究会の開催報告

●日　　時：2015 年 10 月 31 日（土）　　●会　　場：岩手県立大学
●発表件数：23 件　　●参加者数：58 名（内非会員 13 名）

今回の研究会は「学び方の学習とその支援／一般」というテーマで開催されました．自己調整学習，メタ認知などをキーワードに，学習者が学び方を振り返り，よりよくしていくための研究が多数発表されました．経験学習モデルを参照したり，e ポートフォリオを活用したりする事例も見られました．発表は最大 3 セッション平行で行われ，いずれも興味深い内容で活発な議論がなされました．原稿の締め切りが全国大会と近かったことや，会場へのアクセスが不便ということもあり，募集当初は不安もございましたが，当日は多くの皆様にご発表・ご参加いただくことができました．関係した皆様に御礼申し上げます．

担当：市川　尚（岩手県立大学）

日本教育工学会論文誌　特集号　論文募集（最終報）
「特集：新時代の情報教育」のご案内

2006 年 12 月に「情報教育の成果と課題」をテーマとした特集号が企画され，当時の情報教育の様々な取り組みや問題点，今後の普及・進展のために必要な研究成果がまとめられてから，10 年が経とうとしています．その間，ブロードバンドの普及やスマートディバイスの一般化など情報通信技術はますます発展し，情報化社会は劇的に変化しました．また，2013 年度から高等学校で新しい学習指導要領での教科「情報」が全面実施されたり，文部科学省による情報活用能力調査が実施されたりするなど，2020 年以降の学習指導要領に向けた情報教育の実践研究が活発になってきました．

そこで，これからの情報教育について，更なる充実や進展のために必要な研究や，諸外国の動向調査などを幅広く扱った特集号を企画し，下記要領により論文を募集することにしました．対象は初等・中等教育，高等教育，生涯教育・企業内教育など，幅広くとらえております．これらの分野で情報教育に関する研究や教育実践をしておられる会員各位にはふるってご投稿くださいますようお願いいたします．

1.対象分野

（1）諸外国の新カリキュラムに関する調査・事例研究
（2）情報教育と能力測定・入学試験
（3）情報活用能力に関する調査
（4）情報活用能力育成の教育実践
（5）情報モラル教育
（6）プログラミング教育
（7）デジタルファブリケーション
（8）21 世紀型スキル育成を目指した教育実践
（9）これからの情報教育を担う教員養成　など

2.募集論文の種類

通常の論文誌と同様に，「論文」「システム開発論文」「教育実践研究論文」「資料」「寄書」を募集します．それぞれの論文種別については，投稿規定をご覧ください．

論文の査読は，通常の論文誌の場合と同じです．ただし，査読は 2 回限りとし，編集委員会が示した掲載の条件を修正原稿で満たさない場合は採録になりません．「ショートレター」として既に掲載されている内容を発展させて「論文」として投稿することも可能ですが，単に分量を増やして詳細に説明しただけでは発展させたことになりませんので，ご注意ください．なお，本特集号へ投稿された論文が特集号編集委員会にて対象分野外と判断された場合には，一般論文として扱うことになりますので，あらかじめご了承ください．

3.論文投稿締め切り日（2016 年 11 月発行予定）

投稿原稿を 02 月 03 日（水）までに電子投稿をお願いします．ただし，02 月 10 日（水）までは，論文を改訂することができます．締め切りの延長は行わない方針です．

投稿原稿提出締め切り（電子投稿）：2016 年 02 月 03 日（水）
最終原稿提出締め切り（電子投稿）：2016 年 02 月 10 日（水）

4.論文投稿の仕方

原稿は，「原稿執筆の手引」（http://www.jset.gr.jp/thesis/index.html）に従って執筆し，学会ホームページの会員専用 Web サイトから電子投稿して下さい．郵送による投稿は受け付けておりません．

5.問い合せ先

日本教育工学会事務局 Tel/Fax：03-5549-2263 電子メール：tokushu2016@jset.gr.jp

6.特集号編集委員会

特集号編集委員長：
佐々木整　（拓殖大学）
特集号副編集委員長：
東原義訓（信州大学）
堀田龍也（東北大学）
特集号編集幹事：
稲葉利江子（津田塾大学）
村上正行（京都外国語大学）

委員：
安藤明伸（宮城教育大学）
稲垣　忠（東北学院大学）
梅田恭子（愛知教育大学）
小柳和喜雄（奈良教育大学）
加藤　浩（放送大学）
黒上晴夫（関西大学）
新地辰朗（宮崎大学）
高橋　純（東京学芸大学）
辰己丈夫（放送大学）
寺嶋浩介（大阪教育大学）
野中陽一（横浜国立大学）
長谷川元洋（金城学院大学）
福本　徹（国立教育政策研究所）
益川弘如（静岡大学）
村松浩幸（信州大学）
森本康彦（東京学芸大学）

ショートレター増刊号論文募集のお知らせ（第二報）

日本教育工学会論文誌　　vol.40, Suppl.の発行

論文受付締切：2016年04月01日（金）

日本教育工学会論文誌vol.40, Suppl.は，年1回発行されるショートレターの増刊号です．奮ってご投稿下さい．

投稿規定に記述しているように，以下のようになっていますのでご注意下さい．

1. ショートレターは，教育工学に関する，実践的な研究成果，新しい試みやその結果等，教育システム開発等を記述したもの．新規性（オリジナリティ）は必ずしも高くなくても，実践研究の方法と成果を明確に記述したものです．
2. 刷り上がり4ページ厳守です（4ページを超えるものは採録しない）．
3. 筆頭著者（ファースト・オーサー）は本学会会員であることが条件です．あるいは，筆頭著者が投稿時に入会手続きおよび会費納入等をすることが必要です．なお，各会員はショートレターを年1編に限り投稿できます．
4. 2016年12月に発刊の予定です．
   ショートレターの内容については，例えば，以下のような内容が考えられます．

・全国大会や研究会で発表した内容をまとめたもの
・教育システム開発や教育実践をベースにした実践と知見をまとめたもの
・教育工学研究としての速報的な内容
・卒業論文や修士論文等としてまとめた内容，など

なお，ショートレターとして掲載されたものを一層充実させて，論文あるいは資料としての条件を満たすように記述したものは，論文あるいは資料に投稿できます．

ページ数が限られていることから，タイトル，著者，内容については十分厳選の上，ご執筆下さい．

特に，ショートレターの趣旨から，多人数の連名著者はさけて下さい．研究全体がプロジェクトチームによる共同研究であっても，実際にショートレターの限られた内容に直接携わり，執筆した研究者にして下さい．

ショートレターの査読日程予定
（2016年度）：
04月　担当及び査読者の指名
05月　編集委員会で査読進捗状況の確認
07月　編集委員会で採録，返戻の第1回決定
09月　編集委員会で採録，返戻の第2回決定
10月　最終原稿の提出
11月　著者校正
12月　ショートレター増刊号発行予定

投稿の仕方：

原稿は，「投稿規程」と「原稿執筆の手引」（http://www.jset.gr.jp/thesis/index.html）に従って執筆し，学会ホームページの会員専用Webサイトより電子投稿して下さい．会員のIDとパスワードが必要です．

投稿論文は電子投稿でのみ受け付けています．

問い合わせ先：
日本教育工学会事務局
電子メール：short@jset.gr.jp
Tel/Fax：03-5740-9505

大学教員のためのＦＤ研修会（ワークショップ）のご案内（第二報）

この研修会は，日本教育工学会がこれまでの知見を活用し，大学教育の授業改善や教員の授業力向上へ寄与しようと，2008 年度から実施されているものです．大学教員や大学教員を目指す学生などを対象としています．本研修会の修了要件を満たした方には学会より認定書を発行し，本研修を修了したことを証明します．本年度の研修内容は，2011 年度から好評である内容を踏襲し，「大学授業デザインの方法－1 コマの授業からシラバスまでー」をテーマに開催いたします．今回も事前学習用コンテンツを用意し，e-ラーニングと対面研修の組み合わせにより行うことで，当日の活動を，ご要望が多かった，参加度を高めた構成（反転研修）にします．また，昨年度までの FD 研修会修了者向けのファシリテーター研修も併せて実施する予定です．

企画：SIG-01（高等教育・FD），SIG-07（インストラクショナルデザイン）

■ テーマ：「大学授業デザインの方法－1 コマの授業からシラバスまでー」
■ 内容：参加者それぞれが授業実践事例を持ち寄り，ワークショップ形式で行います．授業のデザインに関する問題意識の明確化，授業のデザインに関する情報・課題の共有などから議論を始め，「何を誰に教えようとしているのか」，「どんな方法で教えるのか」，「続けたい点・変えたい点は何か」などをグループで議論しながら授業の改善案を考えていきます．

■ 日時：2016 年 03 月 07 日（月）13:00～17:45：FD 研修
（ファシリテーターとしてご参加される方は，9:30～12:00 のファシリテーター研修及び上記の FD 研修にご参加いただきます）
■ 会場：東京工業大学大岡山キャンパス（東急目黒線，大井町線「大岡山」より徒歩 1 分）
■ FD 研修の定員：30 名（申し込み着順で，定員になり次第，締め切ります）
■ コーディネータ：根本淳子（愛媛大学），渡辺雄貴（東京工業大学），岩崎千晶（関西大学），村上正行（京都外国語大学），市川尚（岩手県立大学），高橋暁子（徳島大学）
■ 担当副会長：鈴木克明（熊本大学）

■ 参加費：2,000 円（学会員），3,000 円（学会員以外）
（参加費の支払い方法は，参加確定後，お申し込みの方に個別に連絡します）
■ 認定書：研修会終了後に最終レポートを提出した修了生には，日本教育工学会から認定書が授与されます．
■ 幹事：渡辺雄貴（東京工業大学），高橋暁子（徳島大学）
■ 申し込み：http://www.jset.gr.jp/work/work160307.html にアクセスし，方法を確認して，お申し込みください．

◆【お問合せ先】　渡辺雄貴　E-mail： fd-staff@jset.gr.jp

○ 準備物：高等教育機関において授業実践を行っている参加者は，自分の授業のシラバス，授業資料（スライド，プリント，板書ノートなど）など，授業に関する資料を 6 部持参してください．学生等で未だ高等教育機関において授業実践を行っていない，もしくは今後実施する予定の参加者は，実施することを想定した授業デザインに関する資料を 6 部持参してください．

○ 情報交換会：セミナー終了後，2 時間程度の情報交換会を予定しております．参加者のみなさま同士や登壇者との有意義な情報交換や FD セミナーへのご意見・ご要望などをお聞かせいただく場としてご活用いただければと考えております．

◎学会日誌

２０１５年

・２０１５年１２月１２日（土）
研究会「学校の教育力向上に資する実践研究」（新潟大学）

・２０１５年１２月１２日（土）～１３日（日）
SIG ０３　教育・学習支援システムの開発・実践 第３回研究会（新潟岩室温泉 富士屋）

・２０１５年１２月１３日（日）
SIG ０４　教育の情報化 第３回ワークショップ「タブレット端末が拓く新しい学び」（新潟大学）

２０１６年

・２０１６年０２月２０日（土）～２１日（日）（予定）
冬の合宿研究会「実践研究のデザイン　－実践を研究に，研究を実践に活かす－」（鳴門教育大学）

・２０１６年０３月０５日（土）
研究会「ICT を活用した学習支援環境・基盤」（香川大学）

・２０１６年０３月０７日（月）
大学教員のためのＦＤ研修会（ワークショップ）「大学授業デザインの方法－1コマの授業からシラバスまで－」（東京工業大学）

・２０１６年０３月１３日（日）
特別企画（実践研究活性化）セミナー（岐阜大学）

・２０１６年０３月１９日（土）
産学協同セミナー「デジタル教材・学習記録の規格標準化の動向と今後教育工学の立場から学習記録データの活用を考える」（株式会社内田洋行　新川オフィス）

・２０１６年０５月２１日（土）
研究会「高等教育における教育方法･FD･IR」（大阪大学）

・２０１６年０９月１７日（土）～１９日（月）
第３２回全国大会（大阪大学）

◎国際会議の案内

２０１６年

・SITE 2016
http://site.aace.org/conf/
(3/21 – 25, Savannah, GA, USA)

・ACHI 2016
http://www.iaria.org/conferences2016/ACHI16.html
(4/24 – 28, Venice, Italy)

・eLmL 2016
http://www.iaria.org/conferences2016/eLmL16.html
(4/24 – 28, Venice, Italy)

・EdMedia 2016
http://www.aace.org/conf/edmedia/
(6/27 – 30, Vancouver, Canada)

・ETWC
http://aect.site-ym.com/news/247297/Call-for-Papers-EDUCATIONAL-TECHNOLOGY-WORLD-CONFERENCE-ETWC-.htm
(7/31 – 8/3, Bali, Indonesia)

・AECT INTERNATIONAL CONVENTION
http://aect.site-ym.com/?futureevents
(10/17 – 21, Las Vegas, USA)

お問い合わせ先 E-mail

● 論文投稿に関するお問い合わせ
編集委員会 editor@jset.gr.jp

● 研究会の開催についてのお問い合わせ
研究会事務局 study-group-core@jset.gr.jp

● 全国大会の開催についてのお問い合わせ
大会企画委員会 taikai2015@jset.gr.jp

● 合宿研究会やシンポジウムの開催についてのお問い合わせ
企画委員会 kikaku@jset.gr.jp

● ニューズレター編集に関するお問い合わせ
広報委員会 kouhou@jset.gr.jp

● その他のお問い合わせ
学会事務局 office@jset.gr.jp

広報委員会

担当副会長　：中山 実（東京工業大学）
広報委員長　：堀田 龍也（東北大学）
広報副委員長：山内 祐平（東京大学）
幹事：高橋 純（東京学芸大学）
委員：池尻 良平（東京大学）
石塚 丈晴（福岡工業大学短期大学部）
冨永 敦子（公立はこだて未来大学）
脇本 健弘（横浜国立大学）

E-mail：kouhou@jset.gr.jp

発行所●
日本教育工学会事務局
〒107-0052
東京都港区赤坂1-9-13
三会堂ビル8階
TEL 03-5549-2263
FAX 03-5575-5366
E-mail：office@jset.gr.jp
http://www.jset.gr.jp
郵便振替00180-2-539055

日本教育工学会ニューズレター
No. 211
2015 年 11 月 27 日

発行人●会長 山西 潤一（富山大学）